

「受難と復活の意味—その意味を悟るために」

ルカ 18:31-34

2020. 6. 21 南与力町教会朝拝

①主の受難と復活の重要性と弟子たちの無理解

主イエスは今日の箇所です。弟子たちに三度目の受難と復活の予告をされています。一度目が9章22節(p.122)、二度目が9章44節(p.124)に記されています。そして三度目がこの18章ですから、ずいぶん間が開いたことがわかります。その間イエス様は様々な教えを語ってこられたわけですが、イエス様は9章51節からすでにエルサレムに向かう旅を始めておられました。それは9章51節に「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」とあることからわかります。その時からここに至るまでイエス様は弟子たちと共にエルサレムへの旅を続けて来られたのです。そしていよいよ旅のゴールであるエルサレムが近づいてきました。それゆえイエス様は12人の弟子を呼び寄せ「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く」とおっしゃったのです。そしてそのエルサレムでいったい自分の身に何が起こるのかを改めて弟子たちに話し始められたのです(マルコ10:32参照)。18章31節～33節をお読みいたします。

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

これまでの受難予告と比べて、より具体的で詳しい描写となっています。しかし続く34節には次のようにあります。

「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。」

弟子たちはこのイエス様の言葉を聞いても全く理解できなかったのです。このような弟子たちの無理解は二回目の予告の際にも語られていました。9章45節

「弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。」

その時と同じように、三度目の予告も弟子たちには理解できなかったのです。三度目の正直とはいきませんでした。また三度目なので少しは理解できるようになったというわけでもありません。34節には「十二人はこれらのことが何も分からなかった」とあります。彼らは「何も、何一つ」分からなかった、理解できなかったのです。

イエス様が繰り返しご自分の受難と復活を予告されたということは、それが非常に重要なことだったということです。私たちも大切なことは何回も繰り返して言うだと思えます。イエス様としては弟子たちにこのことをどうしても伝えておかなければならない、という思いで三度目も受難と復活の予告をされたのだと思えます(ルカ9章44節「この言葉をよく耳に入れておきなさい」)。しかし弟子たちは何も分からなかった。さらに34節後半では「彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである」と強調されています。もちろん、弟子たちも言葉の表面的な意味は理解できたのだと思えます。しかしその言葉が本当に意味していることを弟子たちは理解できなかった。理解が追い付かなかったのです。

それは一体なぜだったのでしょうか。弟子たちはすでにイエス様を信じ、イエス様に従ってきた人々です。18章28節でペトロは「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と言っています。彼らは自分の家や家族を残して、イエス様に従ってきたのです。しかしそのような弟子でもイエス様の十字架と復活については理解できなかったのです。34節で「分からなかった」と訳されている言葉はもともと「一緒に総合する、まとめる」という意味があります。弟子たちはイエス様こそ神の国を打ち建て、統治されるメシアであると信じてたはずです。実際弟子の代表であるペトロはイエス様に対し「(あなたは)神からのメシアです」と信仰を告白していました(ルカ9:20)。しかし、イエス様がメシアであるということと、イエス様が今言われたこと、すなわちイエス様が異邦人の手に渡され、侮辱され、ひどい扱いを受け、殺され、そしてそれから復活するということが、彼らの中で結びつかなかったのだと思います。だからイエス様が何を言っているのか、なぜそんなことを言われるのかが理解できませんでした。彼らがイエス様に期待していたことは、イエス様がエルサレムに行って、栄光の王座に着き、イスラエルをローマ帝国という異邦人の支配から解放してくださること(ルカ24:21)、そしてイスラエルのために国を建て直してくださることでした(使徒1:6)。そういう彼らにとって、イエス様が異邦人を打ち倒すのではなく、異邦人に引き渡されて、侮辱され、殺されてしまうことなど考えられないこと、全く理解できないことだったのです。

34節には「彼らにはこの言葉の意味が隠されていた」と記されています。それは神様によって隠されていたというよりも、彼らの心に覆い(ベール)が掛かっていたために、言葉の意味が隠されていた、見えなかった、ということだろうと思います。それは復活されたイエス様がエマオへと向かう二人の弟子に言われた言葉からもわかります。イエス様が死んでしまった後、二人の弟子は失望落胆してエマオへ向かって歩いていました。そこに復活の主イエスが現れたのですが、彼らの目は遮られていてイエスだと気づきませんでした。イエス様は彼らに次のように言っています。24章25節~27節をお読みいたします。可能な方はお開きください。新約聖書の160ページです。

「そこでイエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

弟子たち「心が鈍かった」ために、預言者たちの言ったことを信じられなかった、預言者たちが予め主イエスの受難と復活について語っていたことを理解できなかったのです。そして27節を見ますとイエス様は「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」とあります。

そしてその後二人の目が開かれ、イエスだと分かったとき、彼らは次のように語り合いました。32節。

「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」。

さらに復活されたイエス様はペトロをはじめとした弟子たちの前にも現れ、次のように言われました。ルカ福音書24章44節から46節

「イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦

しみを受け、三日目に死者の中から復活する。』

このように復活されたイエス様が弟子たちの心の目を開いてくださったときにはじめて、彼らは聖書を悟ることができたのです。すなわちイエス・キリストの受難と復活が、旧約聖書に書かれてあることであり、それがすべて実現した、成就したということを知り、理解することができたのです。

イエス様の受難と復活は、もともと弟子たちにとって理解不能の謎であり、神秘であり、復活の主イエスによって心開かれ、聖書を説明してもらって初めてわかるようなことだったのです。

これは私たちにとっても同じです。いくらイエス様の受難と復活について聞いたとしても、その意味をただちに理解し、悟ることができるわけではありません。私たちも御言葉を理解するにあたって、「物分かりが悪く、心が鈍い」からです。イエス様によって心の目が開かれる必要があるのです。復活されたイエス様は今日におられ、そこから聖霊を送り、私たちの心を開いてくださいます。そうして私たちが御言葉を悟り、主イエスの受難と復活の意味を知ることができるようにしてください。その際、重要なことは主イエスの受難と復活が旧約聖書に記されていた神のご計画の実現であった、ということです。旧約聖書を通してはじめて、イエス様の受難と復活の意味が明らかにされるのです。弟子たちはその説明をイエス様から聞き、心燃やされたのです。そしてその弟子たちがそのことを他の人々にも福音として宣べ伝えていきました。その宣教の様子が使徒言行録に記されています。私たちも主によって心開かれて、受難と復活の意味を悟らせていただきたいと願います。

②旧約聖書の実現としての受難と復活の意味

イエス様はご自分の受難について次のようにおっしゃっています。

「人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す」。

・異邦人の責任、罪

第一回の予告では、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺される」(9章22節)と言われていました。すなわちイエス様が殺される責任は「長老、祭司長、律法学者」というユダヤ人指導者にある、とされていたわけです。しかしこの第三回予告では「人の子は異邦人に引き渡される」と「異邦人」のことが出てくるのです。そして異邦人によって人の子であるイエス様は「侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる」のです。そして異邦人が「人の子を、鞭打ってから殺す」のです。ここには異邦人の責任、罪責というものがはっきりと示されています。イエス様を十字架につけて殺した罪は、ただユダヤ人だけに帰されるべきものではありません。実際に手を下したのは異邦人なのです(使徒2:23)。ナチスドイツはかつて、キリストを殺した罪をユダヤ人のみに帰し、ユダヤ人迫害の一つの根拠としました。しかしそのような考え方は間違っています。異邦人にも責任はあるのです。使徒言行録4章25節から28節には次のようにあります。お聞きください。

「あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、／諸国の民はむなしいことを企てるのか。地上の王たちはこぞって立ち上がり、／指導者たちは団結して、／主とそのメシアに逆らう。』

事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが

油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。」

ヘロデやポンティオ・ピラトといった指導者たち、そして異邦人が、神とそのメシアに逆らったのです。そして嘲り、むち打ち、十字架につけて殺したのです。そこに神と神が油注がれたメシアに逆らう根本的な罪が示されています。そのような人間の罪によってキリストは苦しみを受け、殺されたのです。

・受難と死の意味—わたしたちの罪のために

しかしなぜメシアであるイエス様がそのような目に遭わなければならなかったのでしょうか。人の子が「侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる」という言葉の背後には、イザヤ書 50 章 6 節があると思われます。イザヤ書 50 章 5 節 6 節をお読みいたします。

「主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。打とうとする者には背中をまかせ／ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」

これはイザヤ書に記されている4つの「主の僕の詩」の一つです。ユダヤ人たちはこの「主の僕」がメシアのことを指しているとは理解していませんでした。そうではなく、この「主の僕」は自分たちイスラエルのことだと考え、自分たちが苦難を受けなければならないという意味に解釈していたのです。しかしイエス様はご自分こそが「主の僕」であり、ご自分が受ける苦難においてこの聖書の言葉が実現すると考えておられたのです。そして「主の僕の詩」の四つ目の最後のものが有名なイザヤ書 53 章です。そこにもやはり主の僕が人々から軽蔑され、苦しめられるということが出てきています（イザ 53:3-4）。そしてそれが何のためなのかということもそこにははっきり書かれています。53 章 5 節（旧約 p. 1149）

「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

主イエスが十字架上で刺し貫かれ、殺されたのは、自らの罪のためではなく、「わたしたちの背きのため」、「わたしたちの罪のため」でした。そして続く 53 章 6 節には次のようにあります。

「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。」

私たちは羊の群れでありながら、羊飼いである主から離れ、誤った道を進んでいたのです。それが私たちの罪です。前にペトロが言っていたように、弟子たちは自分の物を捨てて主イエスに従うようになった者たちです（18:28）。では弟子たちには何の罪もないかということそうではありません。ペトロはイエス様が捕らえられる前の夜、次のように言っていました。

「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」（ルカ 22:33）。

自分の命を捨てても、イエス様に従い抜きます、と宣言していたのです。しかしそれにも関わらず、ペトロはその日鶏が鳴く前に、三度イエス様のことを知らないと言ってしまいました。それはイエス様が予告しておられた通りでした。イエス様はペトロの弱さと、彼が犯す過ちをご存じだったので、ペトロは外に出て、激しく泣きました。弟子であっても、自分の命を捨てて、イエス様に従い抜くことができなかったのです。それが弟子たちの弱さであり、私たちの弱さでもあります。しかし神様は

そういうわたしたちの罪をすべてイエス様に負わせられたのです。それが何のためであったかというとイザヤ書 53 章 11 節

「彼は自らの苦しみの実を見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。」

イエス様は「多くの人が正しい者とされるために」、罪人である私たちが義とされるために、私たちの罪を自ら負ってくださったのです。このキリストの苦しみと死のおかげで、私たちは罪赦され、神様の前に義としていただけるのです。

・復活の意味—永遠の命に至るために

さらに主イエスが復活するという事柄も、旧約聖書に書かれていたことでした。ペンテコステの日、ペトロは説教の中で詩編 16 編を引用しつつ次のように語りました。使徒言行録 2 章 24 節から 28 節をお読みいたします。お聞きください。

「しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、／わたしは決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしておかれな。あなたは、命に至る道をわたしに示し、／御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

そして 2 章 31 節では「そして、キリストの復活について前もって知り、／『彼は陰府に捨てておられず、／その体は朽ち果てることのない』／と語りました」と言っています。

そのような聖書の御言葉の成就として、主イエスは復活なされたのです。そして神は、キリストの復活によって「命に至る道」、すなわち永遠の命に至る道を私たちに示してくださいました。そこにキリストの復活の私たちに与える意味があります。

私たちは誰も自分の力で救われ、永遠の命を得ることはできません。しかしイエス様は「人間にできないことも神にはできる」とおっしゃっていました（18 章 27 節）。神様は私たちを救い、永遠の命を与えるために、旧約聖書の時代からイエス・キリストの受難と復活を計画しておられ、時が満ちてそれを実現されたのです。それはキリストの十字架の死によって私たちの罪を赦し、キリストの復活によって、わたしたちに永遠の命に至る道を示してくださいました。それゆえ、このキリストを信じ、従う者は、神の国に入り、永遠の命をいただくことができます。すべてはイエス様の受難と復活によって神様が可能にしてくださったことです。わたしたちにできないことを神様がイエス・キリストを通して可能にしてくださったのです。

この福音の中心を悟り、信じていることができることは、主の豊かな恵みによることです。そしてこのことを悟る時、わたしたちはたとえ苦難や試練の中にあつたとしても、感謝と喜びをもって主に従っていくことができるのです（使徒 4:19 参照）。お祈りをいたします。